

馬先生の思い出

鈴木 陽 一（外国語学部）

馬先生を本学にお呼びしようということになったのは、私が学長補佐の仕事を始め間もない頃であった。その際に、理事長の肝いりでスタートした特別招聘教授という肩書きで馬先生を招請することになったが、これについては、随分といろいろなことがあった。しかしながら、それは全て省略に従う。ともかくにも当時の理事長と中島学長の決断によって、馬興国特別招聘教授が実現した。神奈川大学の国際化の再スタートはそこから始まったのである。馬先生なかりせば、神大の国際化は今も夢、幻のままであったかと思わないわけにはいかない。馬先生は、情が深く、かつ優しい人であった。その情は故国中国、故郷の遼寧省と、青春時代を過ごした大連、そして学びの対象であった日本に、就中神奈川大学に注がれていた。しかも、馬先生は、自らが愛した中国と日本、大連と横浜、遼寧大学、大連外語、神奈川大学の人々に対して、常に優しく接しておられたのである。かつて、馬先生が副学長などの要職を務めておられた遼寧大学を訪問した際、かつての部下の皆さんが、おばちゃん職員も含めて、起ち上がって口々に「馬老（尊敬七分、親近感三分の尊称）」「馬校長」と言いながら、駆け寄ってきたことを鮮明に覚えている。その一事を以てして、馬先生のお人柄が如何に尊敬されかつ愛されていたのか

を知ることとなった。

私は、いわゆる礼儀というものを意識的に拒否して生きてきた人間であり、年上であり、日中友好、或いは学術の国際交流においても先達の馬先生に対して、人間として尊敬の念は抱きつつも、然るべき礼儀を守らなかったと記憶する。そういう駄々っ子のような私に対しても、優しい馬先生はあの温顔をゆがめることなくお付き合以下さり、穏やかに注意されたことはあっても、叱られたことはなかった。今となつては忸怩たる思いである。

馬先生は、同時に極めつきの聡明な方であつた。特に国際交流の交渉の過程で、儀礼的挨拶、学術交流、食事や宴会という個々の場面で、そこに参加しているメンバーのそれぞれの地位や役割を頭に入れて、日本側の誰が、どのように振る舞うべきかをいとも軽々と演出していった。特に、いろいろな場面で、自らは「目立ってはいけない」と考え、常に一歩引き、私のような未熟者を敢えて前に押し出し、これを立ててみせる、そのことによつて私だけでなく、神奈川大学を実像よりも随分と立派なものに見えるように仕向けていたのである。

このことを私が知つたのは、何度目かの儀礼的挨拶の場面での名刺交換の時であつた。馬先生は、日本側の出席者の自己紹介の言葉を通訳しながら、その人物が如何に立派かということを、必ず一言二言付け加えて説明していたのである。こうしたことを短時間の挨拶の中で、神大とそのメンバーのイメージアップをさり気なく実現するというのは、まことに以て「言うは易く行ふは難し」である。

馬先生の優しさと聡明さが最もよく現れたのは、宴会の場面であつた。そこに参加している全員が楽しく過ごせるよう、そして相互理解が一步でも進むよう、その気遣いは並大抵のものではなかった。東北出身の方には珍しく、それほどの酒豪ではなかった馬先生であつたが、いつでも先頭を切つて杯を挙げ、やがて和氣藹々たる

霽開気の中で談論風発、宴会が終わればお互いに「百年の知己」の如くなっていた。しかも、相当に酔いが回っていても、宴の果てた後に、中国側の国際交流担当者として馬先生が具体的なことを打ち合わせする場面を見かけること一度や二度ではなかった。生真面目な馬先生は、自分を信任してくれている学長、理事長の期待に応えるべく、宴会の席でも国際交流担当特別招聘教授としての職分を忘れることはなかったのだ。

私は二〇〇八年の夏から二〇一六年の春まで学内の行政の仕事に携わり、特に中国の大学との交流を拡大すべく、馬先生と共に様々な事業、活動に取り組んだ。その過程の全てが、馬先生と一緒に過ごした時間の全てが私にとっては貴重な思い出である。そしてその結果として、大学の国際化と日中学術交流のため、そして日中交流のためのささやかな貢献を、尊敬し、信頼する、かつ親愛なる「馬老」、馬先生と共になしたのは大いなる誇りでもある。

昨年の秋本学で開催された国際シンポジウム「中国古典小説研究三〇年の回顧と未来への展望」実施に際して、馬先生には大いにお世話になった。その恩返しをする間もなく、馬先生はあまりにも早くあの世に旅立って行かれたことが、私にとって最大の、痛恨の心残りである。馬先生は今度も、あのにこやかな温顔で私のことを許して下さるだろうか。

馬先生、数々の御無礼にお詫びを申し上げ、かつ幾多の御指教に心より御礼申し上げます。

馬先生、神奈川大学のために長い間ご奮闘頂き、本当にお疲れ様でした。まずはゆっくりとお休み下さい。